

ツイキャス読書会 課題図書 井伏鱒二『山椒魚』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『Column Bar 信州 及び ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCv5e0gxXpE28Mbd0A1iGz2R>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 10 回のツイキャス読書会の課題図書は、井伏鱒二の『山椒魚』（新潮文庫）です。

今回もたくさんの応募がありました。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます

それではご紹介していきます。メルマガ読者 belouga さん

『許されないもの』

この小説の作者井伏鱒二氏は、晩年になって山椒魚と蛙が対話した最後の場面を削除したという事だ。井伏氏は、罪のない蛙を巻き添えにした山椒魚に対して、心境の変化があったのだろうか。

私は、一方的に他者によって自分の生活や生命までもを奪われた蛙の魂は何によって救済されるのか、が鍵であるように思う。

以前、神戸連続児童殺傷事件の遺族である山下京子さんの手記を読んだ事がある。我が子の命を不当に奪われた母の苦しみはいたたまれない。しかし山下さんは自分の悲しみを凌駕して逆に世間に問いかける。

「自分という人間が内に抱え持っている『獣性』との闘争があって、初めて人間は人間になれます」

罪を犯した人が、苦しくても自らの罪に向き合う。たとえ生まれ持ったハンディキャップがあっても言い訳をせず闘う。あるいは親の立場の人が世の中の歪みに無関心にならず、闘おうという意志を子どもに見せ続ける。それが亡き娘さんを救う道だと山下さんは感じておられるようだ。

山椒魚は、神を恨むだけで、自分の獣性と真剣勝負をしなかった。山椒魚は罪のない蛙を巻き込み、幽閉して衰弱死に至らせるという最悪の事態を招いたことの認識に乏しく、むしろ蛙が流した心の血を栄養にして生き延びている狡猾さが目につく。

しかし、例えば『罪と罰』のラスコーリニコフが山椒魚と違うのは、老婆殺しの罪を犯した後、とても複雑で不安定な心境であちこち彷徨い、ほとんどボロボロになりながらも、自らの善や悪についての追求を止めなかった点だ。自分の心に抱え持っている獣性と闘っていた。そこにソーニャという神を体現する存在が現れ、心の救済に向かっていったのは、私には腑に落ちる。

山椒魚はいずれにしても、最期は亡き蛙と同様岩屋の中で孤独に餓死の道を辿るしかない。『雪国』のツイキヤス読書会で葉子の解説にあったように、まさに死者とともに「半分死んだように」生きる。これが山椒魚に残された道だろう。作者井伏氏は、山椒魚の心の救済より懲罰を選んだ。しかし、これで蛙が浮かばれるかどうか。考えれば考えるほど深みにはまる。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

「山椒魚」の感想

井伏鱒二の「山椒魚」を初めて読んだ。本作は井伏氏の処女作でとても短い、氏の代表作として挙げられるほどの名作とされているようだ。二度ほど繰り返し読んでみたが、何か深い意味が込められているようにも見えるがはっきりとはわからない。

主人公山椒魚は狭い岩屋から出ずに2年ほど過ごしていたばかりに、その間に成長してしまい外に出られなくなる。特にやることもないので、他の生き物を観察することが彼の主な活動となった。彼は小さな生き物を観察し、その不自由さを嘲笑するが、それが全て自分に返ってくることはすぐに分かる。そして次には涙を流して神に「どうして私だけがこんな目に遭うのか」と訴える。その後、岩屋に迷いこんできた蛙を閉じ込めることで自分と同じ境遇に置こうとする。1年、2年と同じ境遇の中でお互いに弱みを見せぬ我慢比べの末、蛙が「お前のことを怒ってはいない」と語り、空腹で息絶えた。

人間や現代社会に敷衍すると、それぞれ向上心を持たずに居心地のよい環境に安住していたばかりに知らぬ間に状況は悪化し、その環境から抜け出られなくなる若者、自分より地位が下だったり、劣悪な環境で苦労している者を嘲笑することで自尊心を充足させる者、災難や不幸に見舞われたときに神に現状を嘆く者、自分の不遇を嘆き腹いせに部下を虐めて自分と同じ状況に置こうとする会社の上司といったところだろうか。いつの時代にもこのようなことは繰り返し行われているのだろう。

最後に蛙が「お前のことを怒ってはいない」と言ったのは、蛙の最大限の強がりだったのか、同じ境遇で牽制し合いながら歳月を過ごしてきた結果、最後に一種の同志のような感情が芽生えたのか、あるいは自分の死後もまた孤独に生き続けなければいけない山椒魚に同情を抱いたのか。

感想を書く中でいろいろと考えが深まった気がするが、まだ到底理解できたとは言えない。間をおいて繰り返し再読すべき作品なのだろう。

(おわり)

若者VS老害

歳月が経つことによる成長で、頭が出口につかえて棲家である岩屋から出られなくなった山椒魚が、そこへ紛れ込んできた蛙を閉じ込め、道連れにする物語。

「今でもべつにお前のことはおこっではないんだ」(p17)

何故、閉じ込められた蛙は、山椒魚に対して怒っていないのだろうか。「今でも」という言葉から、蛙は最初から怒っていなかったようにも捉えられる。自由を奪われたまま死ぬというのに、本心から出た言葉なのだろうか。

作者は後にこの結末の和解部分をカットしていることから、やはり蛙は怒っていたのではないだろうか。自由に泳ぎ回れたのにも関わらず若くして行動を束縛されるということは、誰だって息苦しいことこの上ない。せっかく生まれてきたのに長年家に閉じ込められるなんて！

しかし、蛙には若さ故、年長者である山椒魚と交渉できる力がなかった。「山椒魚さん、そこから出るの、手伝いますよ」とは言えないし能力もない。山椒魚も、「蛙よ、情けないことに岩屋から出られなくなってしまったから仲間を呼んで助けておくれ」とプライドを捨てて助けを求める術はない。

あるのは沈黙と罵倒。若者と年長者は分かり合うことはできない。年長者は、最初こそ凝り固まった考えから脱出しようとするが結局、「今時の若者は——」と簡単に片付けようとする。若者は、考えが固執している年長者に向かって「この老害！」と心の中で叫ぶ。若者は前例と戦おうとするが、最後に出るのは、「やっぱり前の方がいいですね」という年長者を表面上で敬う言葉。どうせ抵抗しても受け入れられないから諦めると言わんばかりの。

蛙の「今でもべつにお前のことはおこっではないんだ」は、仮に「よくもこんなに長く閉じ込めやがったな！」と最後の叫びをあげたところで何も変えられないからではないか。心を通わせることはできないから、穏やかに最後を迎えたいと考えているのかもしれない。

「くったくしたり物思いに耽ったりするやつは、莫迦だよ」(p11)

(おわり)

「山椒魚」感想文

岩屋の中で2年過ごした山椒魚、そろそろ出ようかと思ったが出られない。まるでぬくぬくとしたコタツから出られない私みたい。

谷川は流れが速く、また天敵もいるだろう。

外気は冷たく、ドラマの続きも気になる。

あと少し、もう少し、と思っている間に早2年。早2時間。

山椒魚も、きつといつ時の間、岩屋で過ごすつもりだったが、あと少し、もう少し、このままぬくぬくと外気にさらされず、天敵から身を隠す、ほんの一瞬過ごすつもりでいたのだと思う。

しかし、周りの変化、自分自身の変化にも気付かず身動きがとれなくなってしまった。

コタツから出ず、ぬくぬくと引きこもっていたら、世の中の変化に気付かず身動き取れなくなった山椒魚と、同じなのかもしれない。

泥臭い小蝦にも笑われてしまう。

体だけでなく、心までも岩屋に閉じこもってしまった山椒魚が神様に祈るところは印象的でした。

つまらない言い争いで周りとう理解しあえなかった為に、どうにもならない状況になってしまうのは、他人事には思えなかったです。

相手を見下したり、つまらない言い争いをするぐらいなら、カエルと仲良くなって協力してもらって、脱出の策を練るなど、他の過ごし方もあったかもしれないと、結果論だけど思ってしまう。

でもなんだか憎めない山椒魚とカエル。

嘆息を漏らす二匹に神のご加護がありますように。

(おわり)

「小説『山椒魚』を読んで～私の解釈」

『何たる失策であることか！』－２年前の初夏の頃であろうか、そのとき戻ったのを最後に岩屋から出ることがなかった山椒魚は、その体の成長故、出入口につかえて外に出られないことに気が付いた。山椒魚はしばらくの間、現実逃避してしまう。

『今は冗談ごとの場合ではないのだ』－冗談のような取り繕いを弄して山椒魚はついに、外に出られるか否かの最終確認に臨む。果敢に挑んだ山椒魚に与えられた結果はしかし、否だった。

ついに絶望的状況と向き合うことになった山椒魚は自らの精神を守るため、感動をもたらす蛙の動きからも目をそらす。活動への希望の断絶故に、目に映る映像と目を閉じた暗闇が等質化し更に逆転して、その暗闇が大きなひとつの世界となり彼に提示された。

そんな或る日、あの感動的な活動を示した蛙が岩屋に紛れ込んできた。山椒魚はその頭で出入口を封鎖し、蛙を閉じ込め、そして怒鳴ってみた。かように他者を自分の身の上に似せるほどの活動力を、自らに実感した山椒魚は満足した。反省して、意地を張りつつも蛙に出てくるよう促し続けた。

平静を取り戻した蛙は、捕食のために自分を閉じ込める思考の混乱した山椒魚に迷惑を覚えた。しかし蛙は、その不自然さにひとつの仮説を立てもした。

翌年の初夏、蛙はそれを確認してみると果たしてそうだった。

山椒魚は蛙から尋ねられてひらめいた。「ここでこう言えば十分だ。」

蛙はそれを聞いて思った。「そうだったのか。俺はここに居てやろう。」

蛙にも山椒魚と同様の誤算があった。その翌年には衰弱で動けなくなっていたのだ。その年両者は、互いの意思を確認し合った。

私は最後の 17 行に矛盾をみる。もし山椒魚が蛙の絶望に気付かなかったのであれば、相手を助けるべく声をかけたはずである。互いの絶望に気付けばこそ両者は相手を気遣い、躓きとなるかも知れない嘆息など漏らさぬよう努めたのである。

二匹の両生類が岩屋で神をみて互いに愛し合うー井伏鱒二はラジカルだ。

(おわり)

Aさんからの質問

ツイキャスでの宮澤さんの解釈にやや疑問を感じた部分がありました。私なりの意見を述べさせていただきますので、それに対する意見をお聞かせ下さい。

本文中に、

「去年と同じく、～散る光景が彼の嘆息を唆したのである。」

とありますが、「同じく唆した」のでしょうか、それとも「同じく散る光景」があったのでしょうか。どちらとするかで解釈が違ってくると思います。

後者であれば、1年という時間の経過を感じている様でもあります。また、「唆された」のであれば、能動的ではありませんので、蛙の悟りとは関係がないのではないのでしょうか。

もう一つあります。Wikipediaに、

『～また同全集の「覚え書」には、改稿のもととなった井伏の考えがこう記された。「後年になつて考へたが、外に出られない山椒魚はどうしても出られない運命に置かれてしまつたと覚悟した。「絶対」といふことを教えられたのだ。観念したのである。」』

と、あるのですから、井伏鱒二は最後の数行をなくしさえすれば、山椒魚の絶望、つまり悟りを描けるということに気が付いたのではないのでしょうか。

私（宮澤）の答え。

山椒魚46 『ふたりセゾン（season）ふたりレゾン（reason）』

溜め息は俗物の祈りです。俗物の特徴は無精神です。

キルケゴールの『死に至る病』に照らして言えば、山椒魚は、岩屋にずっと、入る前から『死に至る病＝絶望＝自己欺瞞』にかかっていた。それは、目を閉じたあとも、蛙を岩屋に閉じ込めたあとも変わらないし、蛙が赦したあとですら変わらないのです。山椒魚は、俗物です。信仰がありません。精神もありません。理性もないでしょう。だから、「神にとって一切は可能である」という「悟り」にもたどり着かないでしょう。

山椒魚は絶望していることに気づいていません。われわれも多くの場合そうです。

『悟り』というのは、自己欺瞞を連鎖から自由になることです。

祈りというのは、悟って（信仰を抱いてから）から意味をもちます。

「神にとっては一切は可能であるということ」を悟り、それを信じる行為こそ祈りです。つまり絶望の度合いが、高次元に至って、破滅するまでに至って、祈りは可能なものです。

俗物（あるいは、おしまいの人間）はそこまで高次元の自覚を（つまりは、悟り＝信仰）もたないので嘆息して、鉢物ようになってしまいます。そしてお互いに嘆息が聞こえないように、自己欺瞞の中でやりくりして、お互いに、ウソをつきあいながら生きるのではないのでしょうか。

『人間が自己の破滅を信じることは不可能である。人間的にはそれが自己の破滅であるということを理解した上で、なお可能性を信ずるといふこと、それが信仰というものである』キルケゴール『死に至る病』

蛙は、途中までは、山椒魚の自己が映った鏡でした。理性（レゾン）のない二匹の俗物です。

しかし、最後の17行で、つまり、二年の季節、まさしく樺坂46の『ふたりセゾン』を経て、死ぬ間際になって蛙は、絶望＝自己欺瞞を自覚したのです。

蛙の溜め息は、すでに「俗物の祈り」ではないからです。蛙は、理性的存在者に生まれ変わりました。蛙の溜め息は、杉苔の花粉の散る光景への美しさへの溜め息です。岩屋のなかの美しさへの感謝です。束縛された不自由の中にも、自由があったことに、気がついたのです。悟ったのです。そして赦したのです。自分自身も、閉じ込めた山椒魚も。それは、最初からです。すべてを原初から赦したのです。

ここに至って、蛙の存在は、山椒魚にとって鏡に映った自分によく似た姿の存在ではなくなっています。

しかし、信仰のない俗物である山椒魚は、まだ、蛙を鏡に映った姿だと誤解して、また、友情（＝下劣な同情）を瞳にこめて『お前はさっき大きないきをしたろう？』と訊ねるのです。

しかし帰ってきた答えは、鏡に映った自己とは全く違うものでした。

死にかけている蛙の『今でもべつにお前のことをおこっていないんだ』というセリフによって、山椒魚は、唐突に赦されます。これによって、鏡に映っていた自分の姿が、ウソだったと気づくでしょう。

死にかけている蛙が、『今でもべつにお前のことをおこっていないんだ』というのは、『こころ』のKが『もっと早く死ぬべきなのに何故いままで生きていたのだろう』という意味の文句を遺書に書いたのと同じことかもしれません。

山椒魚の強情の絶望（山椒魚はどうしても出られない運命に置かれてしまったと覚悟）が、「よくない性質」として彼を食い殺していく一方で、蛙の赦しの言葉は、山椒魚の自身の存在の『書き損ない』として彼を告発し続けます。『こころ』の先生が良心の呵責から学生を巻き込んで自殺していくことに似ています。おそらく、山椒魚は、岩屋で新たな蛙の到来を待ち、彼にすべてを告白するでしょう。『こころ』の先生が学生を蟻地獄に引込んだのように。さらなる『強情の絶望』に陥るでしょう。更に不幸なのは、他の蛙に、告白することで、自分自身の自己欺瞞を無意識に押し付けます。結果『自分に同情するな。自分の同情するやつは下劣だやつのすることだ』（『ノルウェイの森』の永沢の言葉）というのと同じで、新たな自己欺瞞に陥って、他人を巻き込んでいくだけのことです。こうして、山椒魚は、マニピュレーター（潜在的攻撃性の俗物）であり続けます。

『悪魔の絶望は、最強度の絶望である（中略）絶対の強情である（キルケゴール『死に至る病』）』（おわり）

『山椒魚』の感想文

他人を見下しても状況は好転しない

山椒魚のように、いつの間にか身体が大きくなって出られなくなったという体験をした人は滅多にいないだろうが、山椒魚のようにどうしようもない状況にありながら、それを紛らわすかのように他者を見下したりするという経験は誰しもあるのではないだろうか。私もそんな一人である。

山椒魚は、岩屋の出入り口から外を覗き、自分の意思ではなくただ流れのままに動く小魚たちを見て嘲笑する。「なんという不自由千万な奴らであろう！」

なるほど、確かに小魚たちは不自由であろう。しかし、山椒魚が岩屋から出ていくことには何も寄与しないのである。

自分の職場の環境が好ましくない場合、もっとひどい環境や職に就けないものを馬鹿にすることで全能感を味わうということはやりがちだ。やはり、そんなことをしても職場の環境は改善などしないが。

仮にそんなことで現実逃避をしてもすぐに辛い現実に戻されてしまうのである。そう、山椒魚を嘲笑する小蝦や蛙の登場によって。

山椒魚は、そんなときに相手を自分と同じ目に合わせることによって再び全能感を味わおうとする。そうして無益な罵りあいが始まる。

昔読んだ『ネットいじめはなぜ「痛い」のか』という本に、現代のネットをつかったいじめでは匿名性ゆえにお互いがお互いをいじめているという状況が発生すると書いてあった。とすると、この山椒魚と蛙はネットの罵りあいのようなことを延々としていたのではなかろうか。客観的には不毛なことはすぐにわかるのに、やっている当人たちにはなかなか気が付かない。もしかすると、気が付きたくないのかもしれない。しかし、山椒魚たちのようにいつかは本当のことに気が付くだろう。

蛙は最後にこう語る。

「今でもべつにお前のことをおこっちはいないんだ」

結局、怒りや嘲笑の原因は相手ではなく自分にあるのであろう。

(おわり)

『 山椒魚 』 感想 ～蛙の意趣返し～

苔や蘚が密生する暗い岩屋の窪み・・・たまたま紛れ込んだ蛙にとって、そこはこれから始まる二年にも及ぶ苦闘の場所だった。

その岩屋には、自らの成長で外に出られない哀れな山椒魚がいた。悲嘆にくれる時期は過ぎて、山椒魚によくない性質を帯びて来たのが蛙にとって不幸だった。今まで水中を自由に動いていたことが、期せずして山椒魚を羨ましがらせたことも不幸に拍車をかけてしまい・・・閉じ込められたのだ！

岩屋から出られない山椒魚にとって、本来なら自由に出られる蛙を自らの意思で閉じ込めておくことが生きがいになっていたに違いない。コロップの栓になることも神頼みも世間から目を背けることも、すべてやりつくした山椒魚は蛙の人生（蛙生）を支配できる全能感に酔ったことだろう。

お互いに自分の主張をしたり、相手の弱点を見抜いて悪態をつくという能動的な時期もやがて終わりを迎える。二年目に入ると、自らの弱みをみせない精神戦にシフトするのだった。どちらも、「現実」に落胆しているところを見せたら負けという膠着状態だ。

そんな折、不注意にも溜息を洩らした蛙を山椒魚は見逃さなかった。それは山椒魚にとっても喜ばしいことだった。自ら振り上げた拳を下ろすことができなかった山椒魚にとって、長い間共に戦った戦友のような心持ちになっていたからだ。仕上げは、自らの意思で蛙を許し、外に出してやり、再び全能感に浸る・・・はずだった。

しかし、それは山椒魚目線であって、蛙にはそんな生易しいものではないはずだ。物理的に出られない山椒魚と違い、山椒魚の意思のみで自らの運命を左右されたのだ。

いよいよ動けなくなった蛙が「今でもべつにお前のことをおこっちはいないんだ。」という言葉をついた時、山椒魚は驚愕し敗北感に打ちのめされたに違いない。蛙が山椒魚に対して怒りながらも助けを乞い、最後には感謝される場面を想定していたと思うからだ。

でも、「現実」は甘くない。動けない蛙にとって、山椒魚に一矢報いるには、「最初」から恨んでいないという器の大きさを見せつけることだった。

自らが赦すつもりが「赦される」ことで山椒魚は負けたのだ。

（おわり）

岡山読書会のブログです <http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『君の名は？』

『自由とは可能性と必然性の規定における弁証法的なものである。』

キルケゴール 『死に至る病』

「何たる失策であることか！」と山椒魚が、後悔したところで、あとの祭りである。「岩屋から出ることができない」ということが彼の必然性である。そして、岩屋の出入口から眺めるわずかな景色は、可能性となる。群れて暮らすメダカの不自由さを、嘲笑したり、水面の渦に吸い込まれていく白い花びらの美しさに、目眩をおぼえたり、水すましの遊びに見とれたり、突然の蛙の出現と、自由な躍動に、驚かされたり…。まるで、スマホで動画を見るように、自分には無縁の可能性として、岩屋の小窓の情景に心奪われたとき、山椒魚は、目を閉じることにした。自らすすんで言いたのである。

せめて、自分を感動させるものから目を避けないと、世間から忘れ去られた自分の存在がやりきれない。また、物思いに耽ることも、耐えがたい。

山椒魚はだんだん「よくない性質を帯び」ついには、「悪党」となる。

それ故、あの蛙が岩屋に、間違っ飛んで来たとき、自分の頭をコルク替わりに、出入口に栓をして、彼の自由を奪うことで、慰めとするのである。

過干渉によって、子どもの自己重要感や、自由を奪うことで、憂さ晴らしをする、毒親（どくおや）が、この世には結構な数、存在しているという。忘れられた人々。

自分の必然性を人に強いて、人の可能性を潰すような、忘れられた人々がいる。

しかし、口喧嘩＝弁証法的展開の末に「今でも別にお前のことを怒ってはいないんだ」というセリフにたどりつくこの作品は、ユーモラスである。

蛙が、死に際に、山椒魚を赦す展開は意外である。

赦すことで、山椒魚の見えない目に、必然性と可能性を弁証法的に越えた場所に現れる「自由」を、見せつけた。

岩屋の中にも、自由はあった。山椒魚は、救われた。

その自由の発見に、最晩年の井伏先生は、ウソを感じて削除したとしたら…

「ああ、やっぱり、寒いほど独りぼっちだ」

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『山椒魚』 あらすじ (ウィキペディアより)

谷川の岩屋をねぐらにしていた山椒魚は、あるとき自分が岩屋の外に出られなくなっていることに気がつく。二年の間岩屋で過ごしているうちに体が大きくなり、頭が出入り口に「コロップの栓」のようにつかえるようになってしまったのである。ろくに動き回ることもできない狭い岩屋のなかで山椒魚は虚勢を張るが、外に出て行くための方途は何もない。彼は出入り口から外の谷川を眺め、目高の群れが先頭の動きにあわせてよろめいているのを見て嘲笑し、渦に巻き込まれて沈んでいく白い花卉をみて「目がくらみそうだ」とつぶやく。

ある夜、岩屋のなかに小海老がまぎれこみ、山椒魚の横っ腹にしがみつくと。山椒魚を岩石と勘違いして卵をうみつけているらしい。しきりに物思いにふけているらしい小蝦の様子をみて山椒魚は、屈託したり物思いに耽ったりするやつは莫迦だと言う。しかし山椒魚がふたたび出入り口に突進し、栓のようにはまり込んだりといった騒ぎをはじめると、はじめは狼狽していた小蝦も失笑する。

その後、山椒魚は外へ出ることを再度試みるが徒労に終わり、涙を流して神にむかって窮状を訴える。彼は岩屋の外で自由に動き回っている水すましや蛙の姿を感動の目で眺めるが、そうしたものはむしろ目をそむけたほうがよいと考え目蓋を閉じる。彼は自分が唯一自由にできる目蓋のなかの暗闇に没頭し、寒いほど独りぼっちだ、と言ってすすり泣く。

悲嘆にくれるあまり「悪党」となった山椒魚は、ある日、岩屋に飛び込んできた蛙を閉じ込め、外に出られないようにした。蛙は安全な窪みのなかに逃げ込んで虚勢を張り、二匹の生物は激しい口論を始める。二匹のどちらも外に出られず、互いに反目しあったまま1年が過ぎ、2年が過ぎた。蛙は岩屋内の杉苔が花粉を散らす光景を見て思わず深い嘆息を漏らし、それを聞きとめた山椒魚はもう降りてきてもいいと呼びかける。しかし蛙は空腹で動けず、もう死ぬばかりになっていた。お前は今何を考えているようなのだろうか、と聞く山椒魚に対して蛙は、今でも別にお前のことを怒ってはいないんだ、と答える。